アダム・スミスとレッセ・フェール

――大学改革との関連において――

山口正春

一　はじめに
二　グラスゴウ大学の革新性
三　名門オックスフォード大学の学問的沈滞
四　スミスの学問体系
五　大学と社会
六　むすびにかえて

一　はじめに

一七二三年にスコットランドのカーコールディに誕生したスミスは、七歳でカーコールディの市立学校に入学したが、同校を卒業するとスミスは一四歳でグラスゴウ大学に入学した。当時のスコットランドにはアバディーン、セント・アンドリューズ、エディンバラ、グラスゴウの四つの大学があったが、スミスがグラスゴウを選んだ理由は明らかではない。親戚がいたからだとか、スネル奨学金を得てオックスフォード大学に留学できる可能性があったからだとか、様々な推測があるが、一七〇七年の合邦後、アメリカ植民地や西インド諸島との貿易で急速に発展しつつあったグラスゴウの町と、その大学の活気に魅力を感じたのかも知れない。[1]

たとえばラファエルは、スミスがグラスゴウ大学に進学した理由は「恐らくは……スミスが後年そうすることになったように、スネル奨学金を得てオックスフォードのベリオル・カレッジに進学する機会がグラスゴウ大学にあるからであった」[2]と言っている。スミスが入学したグラスゴウ大学の状況はと言えば、「スミスの時代には、学生は全部で三百人にすぎない」[3]地方の貧乏大学であった。だがグラスゴウ大学は、経済と産業に直結した新しい学問をつくり上げていこうと言う、潑剌とした知的雰囲気がみなぎっていた。

さて一七四〇年には、スミスは希望どおりスネル奨学金を得てオックスフォード大学のベリオル・カレッジに進学した。しかし肝心のオックスフォードの学問的雰囲気は、スミスにとって信じられないほどの沈滞したものであった。若き情熱にもえる異国の留学生スミスにとって言い様のない不満が募るばかりであった。そこはグラスゴウ大学とは違って、教師は怠惰で、ろくに授業も行わない有様で、学問的沈滞に陥っていた。[4]もともと国教会の聖職者を教

育・養成することを目的として設立された特権的且つ排他的独占団体で、学問を習得するところではない。大学を卒業すれば、そこで習得した学問や知識が社会で使用価値としてどう役立つかと言うこととは無関係に、大学卒という資格で支配階級たる上流社会に入っていく学生を育てる、そういう特権的富裕大学である。そこに一定期間在籍し卒業したという資格がものを言う。スミス的発想を用いれば、生産者独占の地位にある大学である。大学内部では、これまた生産者（教師）独占のギルド的な構造が支配している。[5]

こうした実情を背景に、教師は自らの義務を怠り、ろくな授業も行わないし、そのくせ気位だけは人一倍高く、いわば特権上にあぐらをかいている。学問内容や教育プログラムそして大学制度も特権に守られた、聖職者養成の文字通り古色蒼然とした古い学問体系で構成されており、グラスゴウ大学の清新な学風を身につけたスミスを満足させるものは何一つなかった。[6] 特権によって保護された体質、ギルド的独占体質の富裕大学は、独占と保護の機構である重商主義の体質と同じものを引きずっているとスミスの目に映り、実に厳しい批判を『国富論』の中で浴びせる。

それでは、このようなオックスフォード大学の実情を踏まえ、母校グラスゴウ大学と比較しながらスミスが思い描いた理想とする大学や学問体系は、一体如何なるものだったのか。そしてスミスは、大学の本来の役割を何と考えていたのだろうか。また大学は何を目指し、制度はどうあるべきだと考えていたのか。さらに言えば、スミスの考える学問の真の担い手とは、一体どのような人なのか。小論では、こうした点に関してスミスの、いわゆるレッセ・フェール（自由放任）の視点を織り込みながら、紙幅の許す限り明らかにしてみたい。

（1） 浜林正夫・鈴木亮『アダム・スミス』清水書院、一九八九年、二七―八頁。山崎怜「初期スミスにおけるスコットラン

ド」『研究年報』⑥、香川大学経済学部、を参照。

（2）D・D・ラファエル『アダム・スミスの哲学思考』（久保芳和訳）、雄松堂出版、一九八六年、一〇頁。

（3）John Rae, *Life of Adam Smith*, with an Introduction "Guide to John Rae's *Life of Adam Smith*" by Jacob Viner, 1977, p.50. J・レー『アダム・スミス伝』（大内兵衛・大内節子訳）、岩波書店、昭和四七年、六三頁。

（4）R.H. Campbell & A.S. Skinner, *Adam Smith*, 1982, p.24. R・H・キャンベル＆A・S・スキナー『アダム・スミス』（久保芳和訳）東洋経済新報社、昭和五九年、二一頁。

（5）内田義彦『経済学史講義』未来社、一九九五年、一一四頁。

（6）だがスミスにとって、オックスフォードの図書館からは実に多くの収穫を得た。スミスの在籍したベリオル・カレッジ付属図書館にせよ、ボドリアン図書館にせよ、相当なものであった。スミスはこの時期に、ギリシャ、ラテンの古典など数多くの書物を読んだ。「こういう静かな読書のためには、ベルオルの環境はスミスにとって有益であった。」（John Rae, *op.cit*, p.22. 邦訳、二七頁。）

二　グラスゴウ大学の革新性

スミスの時代、当初スコットランドはイングランドに比べて産業は遅れ、織物工業はイングランドから大きな打撃を受けつつも、次第に近代化が進み、亜麻産業が育成され、経済的発展も軌道に乗りつつある状態が出現したが、それはまず貿易の成長から始まった。[1] その中心はグラスゴウであり、グラスゴウはアメリカに最も近い港としてアメリカ貿易に利用されるなどしたため前途が開けていったのである。一七一八年には、グラスゴウ市所有の船舶が初めて大西洋を越えた。まさに「グラスゴウは経済の変化が現われ、成長しつつある都市であった。[2]」

だからスミスの時代のスコットランドは、時間的場所的な例外はあるにしても、基本的には、かなり急速な発展過程にあったと言えるだろう。[3] 経済的後進性をもつスコットランドは、経済的に先行するイングランドに「追いつけ追い越せ」と言う意気込みが漲っていたのである。そうした空気の中、自由で進歩的な思想が台頭し、封建主義的な思考に反発する啓蒙主義的態度が見られるようになってきた。[4] この辺の雰囲気について、キャンベルとスキナーは次のように言っている。「グラスゴウは新しい考え方、とくにもっと世俗的で、権威主義的色彩の薄い考え方が、スコットランドにおけるより伝統的な気質の多くを乱し始めた中心となりつつあった。ある者にとっては、一八世紀初頭のグラスゴウにおける展開は、できるだけ迅速かつ効果的に抑圧されねばならない、不穏な異端説のきざしであった。他の者にとっては、それはより自由で啓発的な思想の徴候であり、もはや過去の定説に捉われないものであった」[5]と。

このような状況の中で、「グラスゴウ大学はスミスが入学を許可されるまでに、いくつかの重大な変化――行政および学問的雰囲気の変化――を経験していた。[6]」だから「スミスは……古い要素と新しい要素を併せもつ、過渡期の大学に行き当ったのである。[7]」この頃既にグラスゴウ大学には、学問研究の分野で高い評価を受けていた優れた教師たちが何人かいた。たとえば数学教師ロバート・シムソン、ギリシャ語教師アレグザンダー・ダンロップ、道徳哲学教師フランシス・ハチスンなどである。[8]

しかしスミスにとって最も影響を及ぼしたのは、何と言っても新思想[9]の指導者ハチスンである。ハチスンは当時道徳哲学を教えていたが、自由潑剌たる雄弁と創造性をもって大学内に知的自由を横溢させ、スミスの学問への関心を高め、五〇年後になってもスミスに「忘れえぬハチスン」と言わしめたほどである。真にこの人ほどに、スミスの心をよび醒ましその思想を方向づけた人は、教育者にも著述家にもほかにはなかった。[10]「グラスゴウ大学の教授で、ラ

テン語で講義することをやめて自国語（英語）でやったのはハチスンが最初であった[11]」し、同僚のギリシャ語教師ダンロップと共に、ギリシャ語古典研究を復興した。ルネサンスのイタリアがそうであったように、母国語への目覚めと古典への愛は、ここでも近代文化のスタートであった。

ハチスンの教師としての力量は素晴らしかったらしく、彼の影響力は、とくに市民的自由と宗教的自由との強調を通じてかなり大きかったと思われる[12]。レーが述べているように、ハチスンの講義は「ノートをもたず大いに生気潑剌と語った。しかし学生を鼓舞したのは彼の雄弁だけではなく、彼の思想それ自体でもあった。何事であれ、彼の触れるものを一種の新鮮さと断固たる創意をもって取り扱ったが、それは最も愚鈍なものにでも何事かを考えさせるに違いないようなものであった。また彼は、それをさわやかな知的自由の精神をもっても扱ったので、それを呼吸することは青年にとっては心の力ともなり生命ともなったのである[13]。」

また、三代目シャフツベリー伯を創始者とする道徳感学派の代表者でもあるハチスンは、一七二〇年に、グラスゴウ大学の道徳哲学教授に任命されたが、この講座の前任者ガーショム・カーマイケルの厳格なピューリタニズムとは反対に、宗教的楽観主義をもっていて、神は神秘的なしるしによって知られるのではなく、人類の幸福のために存在するのだと考えていた。換言すれば、人間には元来何が善かを探究させ、それを明らかにさせうる「道徳感」という感情が与えられており、また「最大多数の最大幸福をもたらす行為が最善のもの」という、当時の神こそ神聖にして最善のものという考えを、真っ向から否定する考えを示したのである。つまり神秘的な神の奇跡を信じることより、人類の幸福のために生きることこそ、神の意志だという新しい思想を主張したのだ。こうした点について、レーは次のように語っている。すなわち「ハチスンは新時代に属していた。それは導きの手を自然の光のうちに求め、それに

よって一八世紀の善良にして恵み深き神を発見した時代であった。すなわち神とは、人類の福祉のためにのみ生き給うものであり、神の意志は神秘的な奇跡や摂理から知られるべきものではなくして、人類のより大きな利益――最大多数の最大幸福――についての広汎な考察によって知られるべきものだったのである[14]」と。

ハチスンのこの新しい思想に対しては、一方で進取の気性をもった学生たちに深い感銘を与えたが、他方で、当時のスコットランドの長老派聖職者たちにとっては、気にさわる我慢のならぬことであった。そのため法の下に厳格な処罰をすべきだとの非難を受けた。事実ハチスンは、スミスがグラスゴウ大学に入学した年に「誤った危険な教理」を教えたかどで教会裁判所に告発されたのである。スミスはハチスンの自然神学の講義に参加したらしく[15]、『道徳感情論』や『国富論』に見られる有名な「見えざる手」の思想は、このようなハチスンの神を、さらに近代化したものにほかならない。したがって経済的自由主義が、重農主義者によって公表されるより二〇年も前のグラスゴウ大学の教室に、その萌芽をもっていたとしても、驚く必要はないであろう[16]。「スミスを特徴づけている一切の合理的な自由に対するあの深く強い愛は、ハチスンとの接触によって点火されたとまでは言えないにしても、大いに促進されたに相違ない[17]。」

こうしてグラスゴウ大学には、当時グラスゴウ市の経済的発展に伴って、知的雰囲気としては、進歩的な空気が漲っていたことが理解できるのである。その結果、グラスゴウ大学では、産業革命の本格的な開始を前にして経済と産業に直結した新しい学問をつくり上げていこうとする、意気込みが溢れていたのだ[18]。では次に、スミスの留学先オックスフォード大学に目を向けてみよう。

（1）Campbell & Skinner, *op.cit*, p.58.　邦訳、六七頁。
（2）*Ibid*, p.60.　邦訳、六九頁。
（3）水田洋『アダム・スミス研究』未来社、一九七五年、三四頁。
（4）梅津順一「教会・大学・経済学：アダム・スミスとその周辺」（『教会』（近代ヨーロッパの探究③）望田幸男・村岡健次監修、ミネルヴァ書房、二〇〇〇年、所収）を参照。
（5）Campbell & Skinner, *op.cit*, p.19.　邦訳、十五頁。
（6）*Ibid*, p.18.　邦訳、一三頁。
（7）*Ibid*, p.18.　邦訳、一四頁。
（8）*Ibid*, pp.20-1.　邦訳、一七―八頁。
（9）理神論とも自然神学とも言う。
（10）John Rae, *op.cit*, p.11.　邦訳、一四頁。
（11）*Ibid*, p.12.　邦訳、一四頁。
（12）A・S・スキナー『アダム・スミスの社会科学体系』（田中敏弘他訳）未来社、一九八一年、七頁。
（13）John Rae, *op.cit*, p.12.　邦訳、一四頁。
（14）*Ibid*, p.12.　邦訳、一五頁。
（15）*Ibid*, p.13.　邦訳、一六頁。
（16）*Ibid*, p.15.　邦訳、一八頁。
（17）*Ibid*, p.13.　邦訳、一六頁。
（18）北政巳『スコットランド・ルネサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店、二〇〇三年、第四、五、六、七章を参照。高田紘二『一八世紀スコットランドの制度と思想：スコットランド啓蒙と大学・クラブ・ソサィアティそしてアダム・スミス』時潮社、一九九一年、第一部を参照。

三　名門オックスフォード大学の学問的沈滞

一七四〇年六月、スミスはスコットランドを出発して、オックスフォード大学のベリオル・カレッジに向った。後年、彼がサミュエル・ロジャーズに語ったところによれば、国境を越えてイングランドに入った瞬間から、彼はこの国が富んでいて、自国に比べて農業が進歩しているのに驚嘆したと言うことである。[1]「スコットランドの農業は、一七四〇年にはロジアン地方においてさえまだ始まっていなかった。その地表はどこもはだかで荒れ果てていた。……スコットランドではイングランドの肥った牛に比べると、家畜さえやせて貧相なのであった。[2]」このようにスコットランドとイングランドの経済的格差は著しかった。

スミスが留学したオックスフォード大学のベリオル・カレッジには、当時、一〇名ほどのスコットランドの留学生が在籍していたが、彼らは常に田舎者扱いにされていた。[3] キャンベルとスキナーが言うには、「ベリオル・カレッジはスミスのような関心と気質をもつ人には、あまり適していなかったであろう。大学は党派に分かれ、その一部はジャコバイトであって、浪費は日常茶飯事であったから、五人のスネル奨学生を含むスコットランド人は、カレッジの約百人の学生全体の中では、常に特異な、そしてしばしば軽蔑されるグループであった。だから、彼らは社交を避けがちであった。[4]」

ところで経済的水準ではなく、当時の大学の学問水準を比べてみると、一般に、イングランドの大学はスコットランドの大学にはるかに劣っていたのである。グラスゴウ大学と違って、「ここには〔オックスフォード大学―引用者〕、精神を刺激するシムスンもハチスンもいなかった。[5]」スミスは『国富論』の中で「オックスフォードの大学では、正

教授の大半は、ここ多年にわたり、教えるふりをすることさえ、すっかりやめてしまっている[6]」と痛烈に批判している。

またスミスは当時のオックスフォードについて次のようにも述べ、不快感をあらわにしている。すなわち「近代において、学問のいくつかの部門で行われてきた進歩は、そのうちのいくらかは、疑いもなく大学によってなされたものだが、大部分はそうではなかった。大抵の大学は、そういう進歩があった後にも、進んでそれを採用しようとさえしなかったし、その上、〔大学という〕これら学者社会のいくつかは、長い間、聖域として、つまり打破された体系と古めかしい偏見とが、大学以外の世界のすみずみからも追い出されてしまった後、そこに逃げ場と庇護を見いだす聖域として留まる途を選んだ[7]」と。教師たちは昔のままの、少しも改良されていない伝統の学科について、「わずかばかりの細切れを継ぎはぎして教えることに甘んじていた。しかも、こんな代物でさえ、彼らは投げやりに、うわべだけしか教えないのが通例であった[8]。」

スミスはこうした大学のアカデミズムの沈滞を主として、教師が大学当局の丸抱えになってしまっていて、その結果、自分の講義を進んで受講している学生から、その教師宛の個別聴講料を受け取ってはならないことになっている制度自体にあるとしている。オックスフォード大学のような大きな寄付財産を抱え、そこからの収入でもって教師の給与も十分に賄っていける富裕な名門大学では、学生からの授業料などは全く当てにする必要はない。そこでの教師の労働は、学生の意向や判断に全く依らないところで評価され、その賃金を得る[9]。オックスフォード大学は、こうした制度をもっているとスミスの目に映ったのである。

彼の基本的信念は、後にもまた触れるように「どんな職業でも、それをやっている大半の人々の場合には、努力せ

ざるを得ない必要に比例して努力するのが常である。この必要は、財産をつくるにも、それどころか、日々の収入や暮しの糧を得るにも、彼らの職業の報酬だけを財源とする人々の場合に最大である」[10]と言うものであった。したがって「競争が自由なところでは、誰もがお互いに相手を仕事から押しのけようと努めている競争者たちの対抗関係があるから、各人ともその仕事をある程度は正確に仕上げようと努力しないわけにはいかない。……対抗と競争は、卑しい職業においてさえ、他に抜きん出ることを野心の目標たらしめ、しばしば最大限の努力をひき起こす。」[11]

こうした信念をもつスミスにとってオックスフォード大学は、教師間に彼の考える自由競争を促す理想的な制度になっていなかったのだ。換言すれば、教師の間にレッセ・フェール原理に基づく競争を促す制度は、導入されていなかったのである。その上、教師たちにあっては、自らの職務に関する職業倫理のエートスは微塵も持ち合わせていなかったが、エートスの欠如もスミスにおいては、競争が存在しないことに起因した。スミスにあっては、教育市場においても自由競争の導入あるいは競争原理の採用は、最高の品質改善手段であった。しかしオックスフォードでは、この自由競争あるいは競争原理が欠如していたのである。オックスフォードでは大学の特権の下で、教師たちは自分の生産物である講義の改良努力を怠り、報酬を得る代償としての労働＝講義をするふりすらしないようになってしまっていた。いわばオックスフォード大学の講義や教育は、学生の欲求などは全く考慮されていないのは勿論のこと、世間から分離・孤立した旧態依然としたものになっていたのである。[12]

こうした現実を踏まえ、スミスはオックスフォード大学を論じた文脈で、大学の学問的停滞をひき起こす原因を、第一に、「初期独占団体」という大学の特殊な性格、二番目に、大学の寄付財産、そして第三に、大学の規律に求めたのである。それぞれについて敷衍しよう。

大学での学問が停滞する原因の第一は、初期独占団体という大学の性格によるものだとスミスは言う。これはユニヴァーシティという言葉の起源からも明かである。これは団体を指す本来のラテン語の名称であるが、徒弟制度に基づく同業組合がユニヴァーシティと呼ばれるようになり、当時の大学はこの制度に立脚している。スミスの言い分を聞こう。

「今日とくに大学（ユニヴァーシティ）と呼ばれている特殊な団体が最初に設立された当時にあっては、マスター・オブ・アーツという称号を獲得するために必要な修学年限は、明らかに、これよりもずっと古くから団体がつくられていた普通の職業における徒弟修業の年限を見習ったものだったようである。普通の職業において、しかるべき資格のある親方（マスター）のもとで七年間仕事をしたということが、親方（マスター）となって自分の徒弟をもつ資格を得るために必要であったと同じように、しかるべき資格のある先生（マスター）のもとで七年間勉強したということが、リベラル・アーツの場合も、先生（マスター）、教師または博士（昔はこの三つの言葉とも同義語であった）となって、自分のもとで学ぶ学生（スカラー）または門弟（アプレンティス）（同じようにこの二つはもともと同義語であった）をもつ資格を得るために必要であったのである。[13]」

中世における必須の教養科目としてのリベラル・アーツの習慣は、大学教員となるためではなく、上流社会への登竜門でもある。世に出ようとする人は、その資格を得るために大学に在籍しなければならない。大学は、その資格を付与する「独占団体」として、その特権を思うままに乱用してきた。「卒業という特権は、多くの国で知的職業に就く殆んどの人にとって、つまり学問的教育を必要とする人たちの大多数にとって必須である、あるいは少なくとも、はなはだ好都合である。ところが、この特権は公職にある教師の講義に出ないと、もらうことができない。[14]」大学卒

業者の特権は、徒弟条例の場合と同様であり、教育の進歩には寄与しない。学生に、一方的に教師への服従を強いるだけで、教師は資格付与の独占的地位に守られて、特権的地位に甘んじ、努力を怠るようになる。[15]「大学卒業者の諸特権が、ある大学に何年間か在籍することだけでもらえる場合には、教師の値打ちや評価と関連なしに、必然的に、ある数の学生をそういう大学に押し込むことになる。[16]」

次に、大学の学問的停滞を引き起こす第二の原因である大学の寄付財産について見てみよう。「学校や学寮の寄付財産は、どうしても、教師たちが精を出す必要を多かれ少なかれ減らしてしまうことになった。彼らの生計の資は、その俸給からくる分だけは、明らかに彼らの特定の職業における成功や評価と全く無関係な基金から出ているからである。[17]」この場合には、「教師は彼の生徒から一切の謝礼金や授業料を受け取ることを禁じられており、彼の俸給が、その職務から得る収入のすべてである。……誰だって、出来るだけのんきに暮すほうが得である。だから、もし何か、ひどく骨の折れる義務を果そうが果すまいが、彼の報酬はびた一文変らぬということになっているなら、まず間違いなく彼の利害関係のおもむくところは、……義務を全くなおざりにするか、あるいは、そうまでは容赦してくれそうにないある権威に服しているとすれば、その権威が許しそうな範囲で、出来る限り、身を入れず、お粗末なやり方ですませることになる[18]」とスミスは述べる。詰まるところ、「イングランドの富裕な大学を支配している学問の沈滞は、根本的には、ほかならぬその富のせいである[19]」、このようにスミスは結論を下したとレーは語っている。[20]

さらに学問の停滞を引き起こす第三の原因は、大学の規律にあると見て、スミスは厳しく批判している。大学の規律というものは、教師の利益を守ることを目的としており、教育や学問の発展や、ましてや学生の利益を擁護することなどは考えてもいない。総じて、大学の体質と言うものは、こう言うもので腐敗し切っている。スミス自身は次の

ように言及している。「学寮や大学の校規は、総じて、学生の便益のためにではなしに、教師の利益のため、もっと端的に言ってしまえば、教師の安逸のためになるようにできている。その目的は、どんな場合にも教師の権威を維持し、そして教師がその義務を怠ろうがやり遂げようが、学生の側はどんな場合にも、教師があたかもその義務を最大の勉励と能力でもってやってのけたかのように、教師に対して振る舞うことを強いることにある」[21]と。大学の教師も並の人間であり人の子である。世間における人間一般の労働観をもっている。スミスによれば、労働は自己の安楽を犠牲にするものである。したがってその労働の成果としての報酬が、その過程で努力や勤勉と何らかの比例関係がないならば、誰でもその労働を気楽にやろうとする。独占が成立し、自由競争が存在しないところでは、必ずこの弊害が生じる。

オックスフォードの場合と異って、スミスの理想とするのは「俸給が教師の報酬の一部分、しばしばわずかな部分にすぎず、その大半は、彼の生徒の謝礼金あるいは授業料から出ている」[22]大学である。スミスが学び教鞭を執ったグラスゴウ大学は、事実こうした制度を採っていた[23]。そこでは固定給が、わずかながらあることによって精励の必要はいくらか少なくなるが、全く無くなるのではなく、教師にとって職業における評価は、依然として重要であった。スミスは言う。「教師の職業上の評価は、彼にとって、なおいくらか重要であり、彼は、その授業を受けた人々の愛情、感謝、そしていい評判をなおいくらかは気にする。そして、こうした好意的な感情を得るには、教師がそれに相応しくすること、すなわち有能に、一生懸命に義務のすべてを果すこと以上の手はありそうにない」[24]と。スミス自身は一七六三年末に、グラスゴウ大学教授の職を辞したとき、学生への講義を完了しえなかったので、授業料の一部を学生たちに返却したのである[25]。こうしてスミスはスコットランドの大学の例を示して、教師の間の自由競争つまり競争

原理の導入が、彼らの質的向上と職務への精励とを実現する最もよい方法であると主張しているのであるが、この自由競争とは具体的には、どの教師につくか学生の自由な選択に任せること、教師の収入をこの選択の結果としての授業料の多寡に依存させることを意味するであろう。[26]

だがスミスによれば、当時、ヨーロッパの大学はキリスト教の聖職者養成機関として設立されたものであるから、その当初から自由競争は排除され、教会権力にとって必要な思想を教え込む機関でもあった。[27] スミスは次のように言及する。「ヨーロッパの今の大学は、その大半がもともとはキリスト教会の団体であって、聖職者教育のために設けられたものであった。これらの大学は、法王の権威によって創立され、完全に法王の直接の保護のもとにあったから、教師であれ学生であれ、大学の成員みんなが、その当時の、いわゆる僧侶の特権をもっていたくらいである。……こういう大学の大部分で教えられていたことは、設立の目的にかなうもの、すなわち神学か、さもなければ神学の準備にすぎぬものか、のどちらかであった」[28]と。こうして当時の大学は、現世よりも来世に重点を置く神学中心の学問体系であって、この点からも大学は衰退せざるを得なかった。これに代えてスミスは、自己の理想とするあるべき学問体系を提示する。次にそれを見よう。

（1） John Rae, *op.cit*, p.18. 邦訳、二二頁。
（2） *Ibid*, p.18. 邦訳、二二頁。
（3） F・W・ハースト『アダム・スミス』（遊部久蔵訳）弘文堂、昭和二七年、一二―三頁。
（4） Campbell & Skinner, *op.cit*, p.24. 邦訳、二一頁。
（5） *Ibid*, p.24. 邦訳、二一頁。

(6) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R.H. Campbell & A.S. Skinner, Glasgow edition, Oxford, 1976, Vol.Ⅱ p.761.（以下、*WN* と略記する）大河内一男監訳『国富論』、Ⅲ、中央公論社、一九七六年、一一四頁。（以下、邦訳と略記する）

(7) *WN*, Ⅱ, p.772. 邦訳、Ⅲ、一三〇頁。

(8) *WN*, Ⅱ, p.772. 邦訳、Ⅲ、一三〇頁。

(9) 中谷武雄「アダム・スミスの教育論」『社会科学論集』第四一号、高知短期大学、一三五頁。

(10) *WN*, Ⅱ, p.759. 邦訳、Ⅲ、一一一頁。

(11) *WN*, Ⅱ, pp.759-60. 邦訳、Ⅲ、一一一頁。

(12) 中谷武雄、前掲論文、一三五頁。

(13) *WN*, Ⅰ, pp.136-7. 邦訳、Ⅰ、一〇〇頁。

(14) *WN*, Ⅱ, p.780. 邦訳、Ⅲ、一四〇頁。

(15) 中谷武雄、前掲論文、一三二頁。

(16) *WN*, Ⅱ, p.762. 邦訳、Ⅲ、一一五頁。

(17) *WN*, Ⅱ, p.760. 邦訳、Ⅲ、一一一―一二頁。

(18) *WN*, Ⅱ, p.760. 邦訳、Ⅲ、一一二―一三頁。

(19) John Rae, *op.cit*, p.21. 邦訳、一二六頁。

(20) ロスも同様に、スミスは「当時の大部分の大学とそこの教師たちが陥った堕落と恥辱の原因は、特権をつうじて享受した富裕であった」と考えていた、と述べている。(Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, 1995, p.73.) Ⅰ・S・ロス『アダム・スミス伝』(篠原久・只腰親和・松原慶子訳)、シュプリンガー・フェアラーク東京、二〇〇〇年、八一頁。

(21) *WN*, Ⅱ, p.764. 邦訳、Ⅲ、一一八―九頁。

(22) *WN*, Ⅱ, p.760. 邦訳、Ⅲ、一一二頁。

(23) 坂本達哉「「学問のすすめ」の社会・経済思想：スミス、ミル、福沢」（『古典から読み解く経済思想史』経済学史学会他編、ミネルヴァ書房、二〇一二年、所収）、二七二―五頁を参照。

(24) *WN*, II, p.760. 邦訳、Ⅲ、一一二頁。

(25) Campbell & Skinner, *op.cit*, p.124. 邦訳、一五一―二頁。

(26) 教師の間に競争を導入すると言うことは、独占が存在しない生産分野での生産者と同じように、自己の労働の生産物の質によって価格と買い手を決定していくという市場原理を適応すると言うことである。教師は講義という自分の労働の生産物を、生徒という買い手を見つけ販売する。自己の労働の報酬が市場＝競争原理で決定されると言うことは、報酬は販売量に比例すると言うことである。すなわち教師間への競争制の導入というのは、彼の給与を、生産物である講義の購買料である生徒の授業料で賄うと言うことである。（中谷武雄、前掲論文、一三五頁。）

(27) 大内兵衛「アダム・スミスの大学論」（『大内兵衛著作集』第九巻、岩波書店、一九七五年、所収）を参照。

(28) *WN*, II, p.765. 邦訳、Ⅲ、一二一―二頁。

四　スミスの学問体系

「教育のうち、普通、大学で教えられている部分は、あまりうまくいっていない」[1]と主張するスミスは、大学における学問の歴史的な検討に入っていく。それは内容的には、古代の学問をヨーロッパの大学が、腐敗堕落させていく過程にほかならない。スミスの評価するのは、中世の神学中心の学問体系（哲学体系）ではなく、古代ギリシャの学問体系（哲学体系）であった。彼は古代ギリシャの学問体系と比較する中で、中世キリスト教的なヨーロッパの学問体系を乗り越えようとする。[2] スミスは言う。「古代ギリシャの学問は、三大部門に分れていた。すなわち、物理学つ

まり自然哲学、倫理学つまり道徳哲学、それに論理学である。この大分類は、事物の本性と完全に合っていると思われる[3]」と。しかし時が経つうちに、「学問を分けて三つの部門にするというこの古代の分け方は、ヨーロッパの大抵の大学では、変更されて五部門になった[4]。」そして「ヨーロッパの諸大学が古代の学問課程に採り入れた変更は、どれもが聖職者の教育を狙ったものだったし、また学問を神学研究のもっと適当な入門にしようと狙ったものだった[5]。」

その結果、ヨーロッパの殆んどの大学における学問教育の普通の課程は、次の五部門になった。すなわち、㈠論理学、㈡本体論、㈢気学、㈣決疑論と禁欲道徳論、㈤物理学である[6]。五部門に変更したことから必然的に、「ほんのわずかしか知ることのできない霊についての学説が、実にたくさん知ることのできる肉体についての学説と同じ大きさの場を、哲学体系のうちに占めるようになった[7]。」こうして「どんなに周到な注意をもってしたところで、曖昧なことと不確かなこと以外には、何一つ見い出すことのできない、したがって煩瑣な区別立てと詭弁のほか、何も生み出すことのできない〔霊についての〕主題が盛んに学習されたのである[8]。」その結果、徳を現世の幸福の手段とみなす古代の道徳哲学、真偽を確証するための論理学、スミスにとって物理学・科学的対象であるところのもの、すなわち「実験と観察に相応しい主題」と「周到な注意をもってすれば、非常に有用な発見もできる〔肉体についての〕主題[9]」、これらのものは大学では教えられず、なおざりにされた。スミスにあっては、当時の学問体系では、一切の学問は「神学に従属するもの[10]」としてしか教えられず、それは神中心・教会中心の中世封建社会の学問体系に相応しいものであったが、後述するように、市民社会と市民の学問・思想体系には相応しくはなかった。

人間の解放を求めるルネサンスの思想が、古代ギリシャの文化や芸術にその模範を求めたように、彼がまず、古代ギリシャの学問体系に自己の学問や哲学の拠り所を見い出したとしても不思議ではない。そのことはまた、グラスゴ

ウ大学における道徳哲学講座の初代担当教授カーマイケル以来の伝統でもあり、とりわけスミスの恩師であり、グラスゴウ大学の新しい光、導きの星であった、前出のハチスンの影響によるところが大きかったのである。キャンベルとスキナーは、スミスの古代ギリシャ哲学への関心はグラスゴウ大学で学んでいた頃に、その萌芽があると述べている。すなわち、「スコットランド啓蒙という状況において明らかに重要な一人物であったハチスンは、古典哲学とりわけストア哲学への興味の源として、スミスに深い影響を与えるようになった」[11]と。次の文章には、反中世的・現世主義的・人間中心主義的なスミスの道徳哲学思想が、極めて明瞭に示されているであろう。

「個人としてだけでなく、家族の、国家の、さらには人類という一大社会の一員としてみる場合に、人間の幸福と完成とはそもそも何かと言うことが、古代の道徳哲学の探究しようと企てた目標であった。その哲学では、人生の義務は、人生の幸福と完成の単なる手段として扱われていた。ところが、自然哲学ばかりか道徳哲学も神学に従属するものとしてしか教えられなくなると、人生の義務は、主として来世の幸福の単なる手段として扱われるようになった。古代の哲学は、徳の完成はそれを身につけた人に現世において最も完全な幸福を必然的にもたらすものだ、と主張した。近代の哲学は、徳の完成はだいたい、いやむしろ殆んどいつでも、たとえそれがどんなにささやかなものであっても、現世の幸福とは相容れないものだと主張したのであって、天国は懺悔と禁欲、修道院の耐乏と神に対する卑下によってのみ、勝ち得られるものであり、人間の自由で寛大な、活力に満ちた行動によってではなかった。[12]」

引用文に見られるように、スミスのいう道徳哲学は、人間の、個人として、家族・国家・人類の一員としての、幸福を探究する学問であって、来世のために現世の幸福を否定するものではなかった。[13]そして重要なことは、こういう道徳哲学を含む古代の学問を教える学校は、その教育について国家の保護がなかったのに発展し、その上学問の進歩

も見られたことである。スミスは「文明が進んで哲学や修辞学が流行するようになると、流行の学問を教えてもらうのが普通になった。それでも、これらの学校は、何んら国家の援助を受けなかったのみか、ただ久しく黙認されていただけであった」[14]と述べている。だが近代における学問の進歩は、国家の保護下にあって神学中心の学問体系を教える大学によってなされることは少なく、とくに特権をもつ富裕大学は保守的で学問的停滞に陥ってしまった。他方、貧乏な大学では教師たちの生活の大きな部分が、自らの評判にかかっているから、世界の最近の諸見解に注意せざるを得なくなり、したがって学問の進歩に遅れることも少なかったのである。[15]スミス自身は次のように言及している。「総じて、最も裕福で、最も寄付財産の多い大学が、こうした学問上の進歩を採り入れるのに最も遅く、また既定の教育計画に何らかの重大な変更を認めるのを、最もいやがった。これらの進歩は、比較的貧乏な諸大学のいくつかで、最もすんなりと導入された。それと言うのも、こうした大学だと、教師はその生計費の大部分を自分の評判に依存しているものだから、世間でもてはやされている諸見解に、一層の注意を払わぬわけにはゆかなかったのである。[16]」

これまで、オックスフォードを代表とするヨーロッパの大学が古い封建的体質をもち、神学中心の学問体系や旧態依然とした大学制度の実情、且つそれから必然的に生じてくる学問的沈滞、そしてこれらに対するスミスの批判や古代の道徳哲学に基づいたスミスの学問体系を論じてきた。

次に、将来に向けての彼の理想とする大学教育論とも言うべき見解について、検討しよう。産業革命の本格的な開始を前にして、今後、全面的に開花するであろう新しい社会（市民社会）とのかかわりを視野に入れ、さまざまな観点から改革案を提示している。

(1) *WN*, II, p.765. 邦訳、Ⅲ、一二〇頁。
(2) 野沢敏治「スミスにおける教育と学問」、下、『経済科学』XXIV—一、名古屋大学経済学部、一三〇頁。
(3) *WN*, II, p.766. 邦訳、Ⅲ、一二四頁。
(4) *WN*, II, p.770. 邦訳、Ⅲ、一二七頁。
(5) *WN*, II, p.772. 邦訳、Ⅲ、一二九—三〇頁。
(6) *WN*, II, p.772. 邦訳、Ⅲ、一二九頁。
(7) *WN*, II, p.770. 邦訳、Ⅲ、一二七頁。
(8) *WN*, II, p.771. 邦訳、Ⅲ、一二八頁。
(9) *WN*, II, p.771. 邦訳、Ⅲ、一二八頁。
(10) *WN*, II, p.770. 邦訳、Ⅲ、一二七頁。
(11) Campbell & Skinner, *op.cit*, p.21. 邦訳、一八頁。
(12) *WN*, II, p.771. 邦訳、Ⅲ、一二八—九頁。
(13) 水田洋「アダム・スミスの教育論を中心に」『一橋論叢』第三九巻第四号、三六二頁。
(14) *WN*, II, p.777. 邦訳、Ⅲ、一三六頁。
(15) たとえば、ロックとニュートンの新しい哲学と科学を教育しようという強い関心が、ベリオル・カレッジでは欠如していたが、それらの哲学と科学は、当代社会の関心や必要に注目しなければならないグラスゴウ大学のような貧しい大学では教えられていたと言う。(Ross, *op.cit*, p.73. 邦訳、八一頁。)
(16) *WN*, II, pp.772-3. 邦訳、一三〇—一頁。

五　大学と社会

スミスの活躍した一八世紀は、あらゆることが世俗化、大衆化されて経済的な目で眺められだした時代であった。教会の指導力が衰えつつあり、国家の経済活動への指導が主流になった時期である。それはまた、世俗的欲望をもって暮らす市民の力が無視できなくなった時代でもある。貴族階級、地主階級の旧支配階級が、次第に社会的影響力を失いつつ、代って市民階級が勃興しつつあった。このように一八世紀は、市民の生活と経済力が飛躍的に向上した時代、すなわち近代市民社会の成立をみた時代なのである。(1) こうした時代、スミスは当時のヨーロッパの諸大学、および国家によって保護された特権をもつ富裕大学、典型的にはオックスフォード大学のような中世の神学中心の色彩の強い大学に偏狭的な排他的・ギルド的精神を見い出し、学問生産に無縁と考えられていた市民社会の原理を大学に浸透させようと奮闘したと言えるだろう。ここで言う市民社会の原理とは、言うまでもなく、先に述べたレッセ・フェール原理に基づく競争を促す制度にほかならない。学問的沈滞と腐敗に陥っている大学を活性化させるために、スミスは教師の間に自由競争を促す制度を採り入れ、さらに職業倫理のエートスを教師間に浸透させようと奮闘したのである。

スミスは知的活動を営利活動と同じく利害計算と禁欲の世界から描き、学問生産を一つの世俗的な職業とみなす。したがって教師も、成功と名声と昇進を求める世俗的欲望によって学問業績と教育実績を果たしていく社会における一人の勤労者にすぎない。それは前にも触れたが、次のスミスの文章に明確に読み取ることができるであろう。

「どんな職業でも、それをやっている大半の人々の場合には、努力せざるを得ない必要に比例して努力するのが常

である。この必要は、財産をつくるにも、それどころか、日々の収入や暮しの糧を得るにも、彼らの職業の報酬だけを財源とする人々の場合に最大である。財産をつくるため、いや、暮しの糧を手に入れるためにさえ、彼らは、一年のうちに、一定の価値総額になるように、ある分量の仕事を仕上げなくてはならない。……いくつかの特殊な職業では、うまくゆけば獲物が大きいというので、時には、並み外れた闘志と野心をもった少数の人たちの頑張りをかき立てることも、むろんあるだろう。だからと言って、最大限の努力をひき起こすためには大目標が必要だ、ということにはならないのは明らかである。対抗と競争は、卑しい職業においてさえ、他に抜きん出ることを野心の目標たらしめ、しばしば、最大限の努力をひき起す。これに反して、大目標というものは、ただ大きいと言うだけで、それに向って精を出す必要がなければ、めったに大きな努力をかき立てる力はもたないものである。[2]」

この引用文から分かるように、スミスが醒めた目で市民の集合体である市民社会を見つめ、その社会での人間を利己心に基づいて敏感に動く市民として把握していることである。スミスの視野にあるのは、「対抗と競争」を直接の目的としている「普通の資質をもった大部分の人々」であって、決して「並み外れた闘志と野心」をもって大きな目的に挑む特異な人間ではなかった。「他に抜きん出ることを野心の目標としているごく普通の平凡な人間」、換言すれば常に社会の中にあって、はたの目を気にし、他人の評判を得て尊敬を受け、他人に多少の差をつけたいと思っている平凡な並の人間に目が向けられている。[3] 個人の特殊な目的の追求ではなく、人々の利己心に基づき財産と地位という社会的必要性によって労働がなされる市民社会、その社会における社会的評価の立場から学問内容を問い直すために、スミスは常に社会的必要性の世界を登場させる。[4]

スミスの市民社会は、特権とか権威の有無や所属による価値評価に関係なく、現実の研究成果や客観的結果、第三

者評価によって社会・他人に有用と実証されるかぎりでの個人的実力、それを評価する人々の集合である。[5] 肩書やブランドといった表面的・形式的なものではなく、実力・実利がものをいう社会、それがスミスにとっての市民社会なのである。大学も、こうした市民社会の原理が通用するところでなければならない。「学生の集まる場所としての大学は、その特権に依存するのではなく、価値に依存すべきである。すなわち大学の教育能力と教育にあたっての熱意に依存すべきである。[6]」これがスミスにとって、大学の本来のあるべき姿であった。

俸給に関して言えば、寄付財産の多い特権的な富裕大学にあっては、莫大な固定給与が腐敗と堕落の原因になるし、さらに教師個人の経済的利益は、社会的需要のある学問的分業の組み換え、つまりカリキュラムの変更にはつながらず、そこはキリスト教中心の中世的学問体系の逃げ場と化してしまった。このようにスミスは認識していた。スミスの理想とするのは、前述した「俸給が教師の報酬の一部分、しばしばわずかな部分にすぎず、その大半は、彼の生徒の謝礼金あるいは授業料から出ている」大学であった。もし教師の俸給を学生から直接受け取るようにすれば、教師は実りある講義をするために、多少とも骨を折ろうという気持ちになるはずである。なぜなら、教師が怠慢で無能ならば、学生の意志で教師を取り替えることができるからだ。つまりスミスによれば、大学は学問生産の場であり、本当に優れた学問を生み出すためには、需要する側、いわば消費者＝学生の選択の自由が保証されていなければならなかった。

またスミスは、大学を腐敗させた大学特有の人為的諸制度を検討し、これらの廃止を訴える。スミスにあっては、特定指導教師を割当てたり、受講科目を指定したり、講義への出席を強制したりする、これらの人為的諸制度は、教師の価値と名声とは無関係に、いわば売手独占の立場にたち、学生の自発的な知的欲求を無視するものであった。ス

ミスはこうした諸制度を廃止して、学生たちが自由に選べるようにすること、つまりレッセ・フェール的視点を要求するのである。大学を学問生産の場と見て、消費者＝学生の選択の自由こそが、正常な学問生産を保証する唯一の道であるとするスミスの目から見れば、当時の聖職者養成のヨーロッパの大学、特権的な富裕大学は、消費者＝学生の利益を無視した生産者独占の重商主義的大学と映ったのである。[7]

更に教師について言えば、スミスは特権的富裕大学の「公職にある教師」よりも「私教師」のほうを、啓発的教育をなす真の教師と学問生産の担い手として高く評価する。[8]「公職にある教師」は、特権に守られながら俸給をもらって堕落しているにもかかわらず、社会的地位は高い。これに反して「私教師」は、「国から少なからぬ奨励金をもらって商売している商人たちと競争しようとしている奨励金なしの商人」[9]のような不利な立場にあり、収入は少ない。また「私教師」には、学位授与特権がないから、学位を必要とする職業に就こうとする学生は彼のもとに集まらない。したがって特権をもたない「私教師」は、有能で実力があっても、社会から「学者のなかの最下層にあるもの」[10]と考えられ、社会的評価からは閉ざされている。こうしてスミスにあっては、教師は「公職にある教師」よりも「私教師」のほうが勤勉だし、教育熱心且つ学問研究に意欲的だと考えている。スミスにとって社会につながる真の大学とは、教師の収入の大部分を学生が払う授業料や謝礼金などからの当然の収入にたよる地方の貧乏大学であり、学位授与の特権をもたない「私教師」のところ、ここにおいて教師の義務は勤勉になされ、社会にとって必要な学問が生産される。

教師たちが、どの位精を出す必要に迫られているかは、大学の制度いかんに対応している。教師の価値を映しだす鏡は、「講義をさぼったり、あるいは出席しても、恐らくは一見明白な無視、軽蔑、嘲弄の色を示して講義を聞いて

いる」[11] 大多数の学生なのである。彼らは、中世的学問には目もくれず、ひたすら近代的学問を習得しようとし、卒業後は社会的に有用な世間の実務に就いたり、社会的に重要なポストに就いたりする学生なのである。産業革命に突入しようとする時代において、古い体制側の特権をもった富裕大学からの圧力にも屈することなく、未だ全面開花していないが、歴史的に生成しつつある市民社会の要求に全力投球で全身の力を込めて答える人、こういう人物こそがスミスにあっては、真の教師であり学問生産の担い手として相応しいのである。自由と平等でひらの個人の集合体である市民社会、そこでは競争によって成功と名声と昇進を求める世俗的欲望が渦巻く。その市民社会において問われることは、学位称号の有無やどこの名門大学に所属しているかと言うことではなく、勤勉と実力の有無であり、社会のために実際、何を生み出し何を生み出そうとしているかである。

（1）小林章夫・齊藤貴子『諷刺画で読む十八世紀イギリス：ホガースとその時代』朝日新聞出版、二〇一一年、六三頁。
（2）*WN*, II, pp.759-60. 邦訳、Ⅲ、一一一頁。
（3）内田義彦、前掲書、一〇九頁。
（4）野沢敏治、前掲論文、一二八頁。
（5）同論文、一三四頁。
（6）John Rae, *op.cit*, p.277. 邦訳、三四五頁。
（7）内田義彦、前掲書、一〇二頁。
（8）*WN*, II, p.780. 邦訳、Ⅲ、一四〇頁。
（9）*WN*, II, p.780. 邦訳、Ⅲ、一四〇頁。
（10）*WN*, II, p.780. 邦訳、Ⅲ、一四〇頁。

(11) *WN*, II, p.763. 邦訳、Ⅲ、一一八頁。

六　むすびにかえて

既述のように、スミスが入学した頃のグラスゴウ大学は宗教的偏見からは比較的自由で、活気に満ちていた。それは一七〇七年の合邦以来、次第にスコットランドが急激な経済発展と、それに伴う文化運動高揚の手掛かりをつかみつつある時代を反映していたからである。この頃既にグラスゴウ大学には、学問研究の分野で高い評価を受けていた教師が何人かいた。しかしスミスに最も影響を及ぼしたのは、何と言っても新思想の指導者ハチスンであった。ハチスンは当時の神こそ神聖で最善のものと言う考えを真っ向から否定する見解を提示したのである。ハチスンにあっては、神学こそ学問だとする考えは宗教的偏見であった。本来、人間にとって学問も思想も自由であるべきものであって、個人の良心を越える神の存在を盲目的に信じることこそ誤りだとして、当時宗教的な抑圧の強かった時代に、大胆に宗教的・政治的自由の諸原理を称賛したのである。こうしたことは、進取の気性をもった学生たちに深い感銘を与えたことは記憶されてよいだろう。

さてスミスはグラスゴウ大学で学んだ後、スネル奨学金を得てオックスフォード大学ベリオル・カレッジに留学した。[1] しかし肝心のオックスフォード大学の学問的雰囲気は、スミスにとって信じられないほど沈滞したものであった。そこはまた、目に余るほどの腐敗と堕落が蔓延していた。こうした状況になった原因としてスミスは、主に次の三つを挙げた。すなわち、㈠国家によって保護された排他的な独占団体という大学の性格、㈡寄付財産が莫大であり、

教師たちは、どんな無能でも決まった俸給を受け取ることができるシステム、㈢学生の利益でなく、教師の利益と安逸のためにできている大学の規律である。

このような現状を打破し、正常な本来の大学を取り戻すには、レッセ・フェール的な視点からの自由競争を導入することが必要だ、とスミスは痛感したのである。それに伴って、教師間に職業倫理のエートスも生まれてくるだろう。自由競争が作用すれば、世間で需要があり人気のある教師、科目や大学は繁栄し、そうでないものは廃れていく。自然淘汰に任せておけば、必要なものだけが教えられるようになり、不必要なものがはびこる心配はなくなる。余分な経費を支出する危険性も減少する。レッセ・フェールの側面からする、スミスによる教育分野への競争原理導入の主張は、このように要約できるであろう。(2)

そもそもスミスにあっては、イギリスで産業革命がこれから本格化しようとする時期を迎えるに当って、目の前に歴史的に生成しつつある市民社会の存在があった。そこでは自由な競争によって、成功と名声と昇進を求める世俗的欲望が渦巻く。大学にあっても同じく、自由競争の原理を導入することによって、教育と学問を特権的富裕大学＝重商主義的大学の生産者独占から引き離し、消費者＝学生と地方の貧乏大学の教師と特権をもたない私教師に解放しようとスミスは考えたのである。そのためスミスは、古い学問体系と教育体制と格闘し重商主義的大学超克に渾身の力をふりしぼり、代わって学問生産には無縁と考えられていた市民社会の自由競争原理と職業倫理のエートスを大学に浸透させようと骨を折ったのである。

換言すれば、体制側の特権的富裕大学と違って何の特権もないひらの、いわば市民社会的大学同士がお互いに自由に競争し合うことによって、社会のための学問生産を押し進め、社会の利益と人々の幸福に貢献する。教師も成功と

名声と昇進を求める世俗的欲望によって学問的業績と教育実績を果たしていく、それが「見えざる手」によって大学の学問の進歩と社会の福祉向上につながる、そういう社会に結び付いた大学づくりのためにスミスは自らの理想とする改革案を提示したと言えるのである。

（1）浜林正夫・鈴木亮、前掲書、三一頁。

（2）中谷武雄、前掲論文、一四〇頁。